

Arabella Miho Steinbacher

interview

アラベラ・美歩・
シュタインバッハー
インタビュー

マゼール、プロムシュテットなど世界的指揮者から愛されるヴァイオリニスト、アラベラ・美歩・シュタインバッハー。ドイツ人の父と日本人の母を持つ彼女の祖父母が臼杵市出身ということで、縁のある大分でストラディヴァリウスを奏でます。今回、7月の公演を前に来日したシュタインバッハーさんにお話を伺いました。(3/6東京・フジテレビにて)



—ヴァイオリンを始めたきっかけを教えてください。
母のすすめですね。母は歌手、父はミュンヘンのオペラ座で働いていたコレペイトール（オペラ練習時のピアノ伴奏や指導を行う人）だったので、小さい頃からいつも音楽が家中に溢れてたんです。そんな中、母が「私にも何か夢中になれるものを」と勧めてくれたのがヴァイオリンでした。偶然家の近所でスズキ・メソッドの指導をしている先生がいらしたの、そこへ通いました。3歳の時です。

—ヴァイオリンを続けられた理由は？

たくさん弾きたい曲があるからでしょう。次々と新しく魅力的な作品に出会えます。弾けるようになるにはどうしたら良いか？って、結局練習するしかないんですよ（笑）。

—「ストラディヴァリウス」の魅力を教えてください。

今私で使用している楽器は、日本音楽財団からお借りしている1716年製のストラディヴァリウス「ブリス」で、この楽器からたくさんのインスピレーションを受けています。楽器が300年以上もの間経歴してきたことが木に染み込んでいて、演奏しているとそれを感ずることができると言います。このストラディヴァリウスは、明るい音色の他に深みのある音色も出せて、私はとても気に入っています。演奏していると自分の感情に対して楽器が反

応し、それに対してまた自分の感情が重なっていったり…。この14年間で、さらに楽器の音色が豊かになってきたような気がします。

—7月の演奏会のプログラミンの理由と、意図を教えてくださいませんか？

今回はまず、バッハとベルトの曲を演奏したいなと思いました。バッハの2つは時代も雰囲気も違うのですが、神聖な面を持っているという共通点があります。またこれらの曲はとても瞑想的で、普段から瞑想するのが好きな私にとって、とても親しみやすいんです。瞑想をすることは身体的にも精神的にも大事なことで、集中して内面を感じることでバランスを取っています。そこに古典のベートーヴェンと近現代のプロコフィエフの曲を加えて、より色とり

どりのプログラムにしてみました。

—大分にご縁がある（母方の祖父の出身が臼杵市）とのことですが、大分の印象はいかがですか？

大分に降り立つと、柔らかい空気が自然豊かな景色、人々のおおらかさなどに触れて、これが自分のルーツだと感じます。

—最後に、大分の聴衆の皆さんにメッセージをお願いします。

祖父の故郷である大分で演奏できること、同じ故郷の人々と感動を分かち合えることは、私にとって特別なことです。日常の喧騒から離れて、音楽を通して皆さんと心を通じ合わせたり、静寂の中で音だけに集中することによって、聴衆の皆さんにも非日常を味わっていただけたら嬉しいです。

Data

iichiko presents
アラベラ・美歩・シュタインバッハー
ヴァイオリン・リサイタル

2019年7/16(火) ▶ iichiko音の泉ホール

[時間]開演19:00、終演予定21:00 [料金]全席指定一般4,000円(友の会びび3,600円)、U25割2,000円(25歳以下) [ヴァイオリン]アラベラ・美歩・シュタインバッハー [ピアノ]入江一雄
[曲目]J.S.バッハ:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ短調 BWV1020、L.v.ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ第9番 イ長調 Op.47「クロイツェル」、A.ベルト:フラトレス、S.プロコフィエフ:ヴァイオリン・ソナタ第2番 二長調 Op.94a [問] iichiko総合文化センター Tel:097-533-4004